

無限次元ガウスの消去法を用いた radii-polynomial approach の改良

関根研究室 2131701 齋藤 悠希

はじめに

微分方程式を計算機で解くとき,
計算機の資源が有限という特徴のために
方程式の解に誤差が発生する.

→ 解の誤差を評価し, 精度を保証する.

精度保証付き数値計算

背景 - van der Pol 方程式

van der Pol 方程式

$$\frac{d^2 x}{dt^2} - \mu(1 - x^2) + x = 0$$

- 未知関数 : $x(t)$
- パラメータ : $\mu > 0$

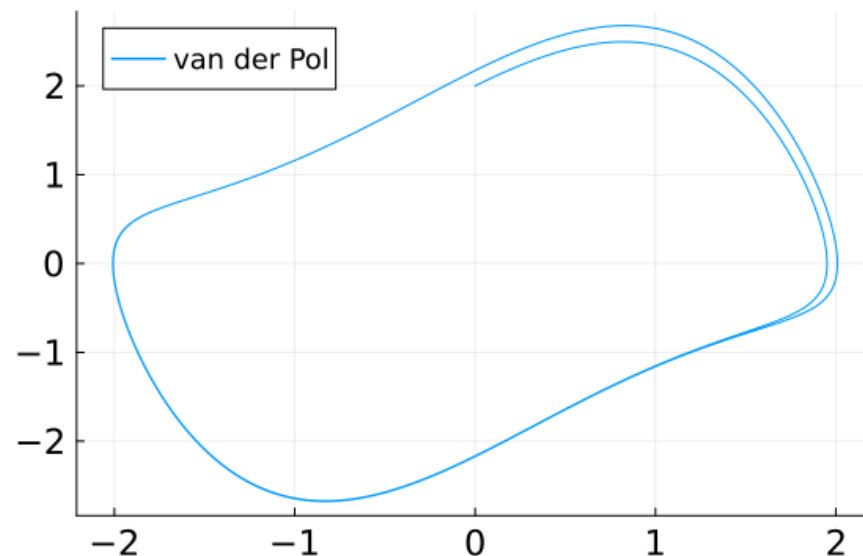


図 1: van der Pol 方程式
初期値 $(0, 2)$, $\mu = 1.0$

背景 - 先行研究

radii-polynomial approach [1]

X, Y	Banach 空間
$\mathcal{L}(X, Y)$	$X \rightarrow Y$ への 有界線形作用素の集合
A^\dagger	$\mathcal{L}(X, Y)$ の要素
A	$\mathcal{L}(Y, X)$ の要素
F	C^1 -Fréchet 微分 可能な作用素

$$\|AF(\bar{x})\|_X \leq Y_0$$

$$\|I - AA^\dagger\|_{\mathcal{L}(X)} \leq Z_0$$

$$\|A(DF(\bar{x}) - A^\dagger)\|_{\mathcal{L}(X)} \leq Z_1$$

$$\|A(DF(b) - DF(\bar{x}))\|_{\mathcal{L}(X)} \leq Z_2(r),$$
$$\forall b \in \overline{B(\tilde{x}, r)}$$

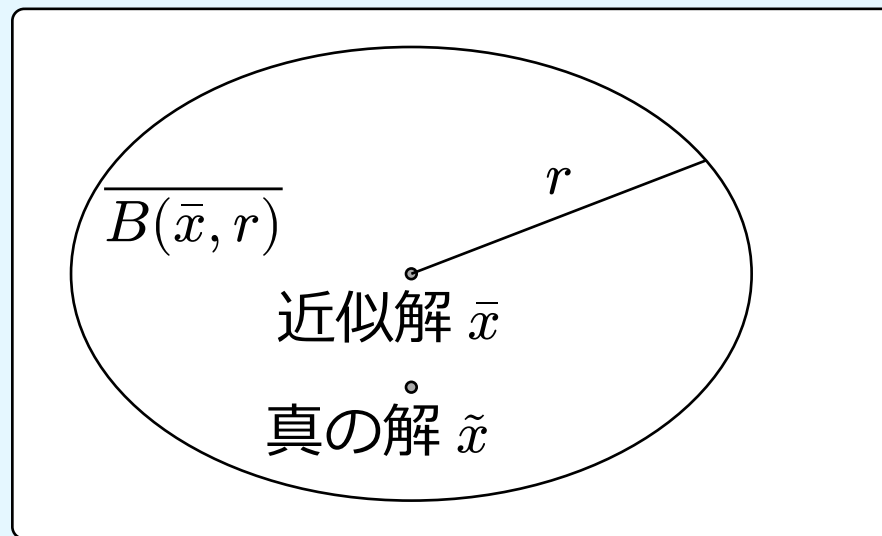
背景 - 先行研究

radii-polynomial approach [1] (続き)

radii polynomial を以下で定義する.

$$p(r) := Z_2(r)r^2 - (1 - Z_1 - Z_0)r + Y_0$$

$r_0 > 0$ かつ $p(r_0) < 0$ なら,
 $F(\tilde{x}) = 0$ となる解 \tilde{x} が
 $\overline{B(\bar{x}, r)}$ 内に一意に存在する.



参考 : [1] 高安亮紀, Julia 言語を使った精度保証付き数値計算のチュートリアル

背景 - 先行研究

西窪の研究[2]では, radii-polynomial approach において作用素 A を,
「 A^\dagger の近似逆作用素 \rightarrow 真の逆作用素」とおき,

$$A \approx DF(x)^{-1} \rightarrow A = DF(x)^{-1}$$

$$AA^\dagger \approx I \rightarrow AA^\dagger = I$$

ノルムの計算を簡略化.

$$\text{例)} \quad \|A(DF(\bar{x}) - A^\dagger)\| \leq Z_1 \Rightarrow \|ADF(\bar{x}) - I\| \leq Z_1$$

\rightarrow 精度は大きく低下しない, 計算時間は短縮

参考: [2]西窪壱華, radii-polynomial approach における零点探索手順の削除

既存手法と問題点

無限次元サイズの行列 $DF(\bar{x})$

→ 有限で打ち切り, コンピュータで計算

打ち切った分を調整するため, 重み付きノルムを使う

重み付き l_1 ノルム

$$\|a\|_{\omega} := \sum_{k \in \mathbb{Z}} |a_k| \omega_k < \infty$$

既存手法と問題点

重み付き l_1 空間

$$l_{\omega}^1 = \left\{ a : \|a\| := \sum_{k \in \mathbb{Z}} |a_k| \omega_k < \infty \right\}$$

l_1 空間

$$l_1 = \left\{ a : \|a\| := \sum_{k \in \mathbb{Z}} |a_k| < \infty \right\}$$

ノルムの値は「重み付きノルム」 > 「 l_1 ノルム」

→ 条件の不等号を満たすために, a が限られる.

→ l_1 ノルム (l_1 空間) で計算する.

問題解決法

l_1 空間で計算するために、無限次元ガウスの消去法[3]を使う.



作用素 DF が全単射であることを確認しなければならない.

参考 : [3]Kouta Sekine, Mitsuhiro T. Nakao, and Shin'ichi Oishi; "Numerical verification methods for a system of elliptic PDEs, and their software library"

目的

radii-polynomial approach の適用できる
問題の範囲を増やす



無限次元ガウスの消去法を用いて,
 l_1 空間で線形作用素が全単射であるか確かめる

提案手法

$\phi := DF(\bar{x})^{-1}F(\tilde{x})$ とおくと,

$$DF(\bar{x})\phi = F(\tilde{x})$$

無限次元ガウスの消去法を用いて, $DF(\bar{x})^{-1}$ の全単射性を確かめる.

提案手法

射影演算子 Π_N と作用素 A より, 以下の作用素を定義する.

$$\begin{aligned} T &:= \Pi_N ADF(\bar{x})|_{X_1} : X_1 \rightarrow X_1, & B &:= \Pi_N ADF(\bar{x})|_{X_2} : X_2 \rightarrow X_1, \\ C &:= (I - \Pi_N)ADF(\bar{x})|_{X_1} : X_1 \rightarrow X_2, & E &:= (I - \Pi_N)ADF(\bar{x})|_{X_2} : X_2 \rightarrow X_2 \end{aligned}$$

$DF(\bar{x})\phi = F(\tilde{x})$ は, 作用素の定義より, 以下に変形できる.

$$\begin{pmatrix} T & B \\ C & E \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \Pi_N \phi \\ (I - \Pi_N)\phi \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \Pi_N AF(\tilde{x}) \\ (I - \Pi_N)AF(\tilde{x}) \end{pmatrix}$$

提案手法

$S := D - CT^{-1}B$ としたとき,

$$\|I_{X_2} - S\| < 1$$

となれば, S は全単射となる.

S は, A と $ADF(\bar{x})$ から求められる.

$$\begin{aligned} S &:= D - CT^{-1}B \\ &= (I - \Pi_N)ADF(\bar{x}) - ((I - \Pi_N)ADF(\bar{x})) \\ &\quad (\Pi_N ADF(\bar{x}))^{-1} (\Pi_N ADF(\bar{x})) \end{aligned}$$

実行環境

表 1: 実験環境

環境	詳細
CPU	12th Gen Intel(R) Core(TM) i7-12700
OS	Ubuntu 24.04.1 LTS
コンパイラ	Julia 1.11.2
微分方程式解答ライブラリ	DifferentialEquations v7.10.0
数値計算ライブラリ	IntervalArithmetic v0.20.9

実験結果

表 2: フーリエ係数の次数の変更による $\|I_{X_2} - S\|$ の比較

次数	$\ I_{X_2} - S\ $
50	0.22815114629236252
100	0.11455533660051737
150	0.07655718822651922
200	0.05749210273025131

- $\|I_{X_2} - S\| < 1$ を満たした.
- 次数が上がるにつれ, ノルム値が減少.

まとめ

- 無限次元ガウスの消去法を用いた radii-polynomial approach の改良手法を提案した
 - 数値実験での検証により, l_1 空間上で $DF(\bar{x})$ が全単射であることがわかった.
- 提案手法で改良可能であることがわかった